非常通信周波数

JJ1SXA/池

A1 電波の出せる3アマ以上の資格者で、4630KHz が免許されている局は結構多いようですが、この周波数で非常通信ができる局はどの位いるのでしょうか？

私も、リグがこの周波数を出せるので、ついでに申請し、免許されていますが、実際にこの周波数で非常通信ができるとは思っていません。

理由は簡単です、和文 CW が達者では無いからです、少し位和文の QSO ができる程度では、とても無理です。

非常時に、公的機関との通信は、現役や元のプロの通信士、プロと同等の実力を有するものでなければ、大事な通信文の送受には係わるべきではありません、間違った情報の伝達は、非常時に混乱を起こすのみならず、人命にも係わります。

業務無線局とアマチュア局が交信するために、公衆電報形式のような統一された電報形式が必要になり、4630 全国ハムネットでは業務無線局とともに非常通信(訓練含む)を行うことのできるアマ無線家の和文電報文の形式統一が図られ、略語等も、統一したものができあがっていて、熱心に非常通信訓練を繰り返し、常に和文の腕を磨いているようです、 我こそはと思う方は、4630 全国ハムネットに参加して、和文 CW の腕を鍛え、ご活躍いただきたいと思います。

現在は、携帯電話の普及で、一人 1 台と言っても良いような時代ですが、私が幼少の頃は、電話があるのは、商売をしている家か、個人では金持ちの家のみ、一般家庭には縁遠い存在で、電話をかけるためには、電話がある家に頼むか、郵便局の電話（当時は公衆電話とは言わなかった？）を借りると言うような状態でしたが、電話の相手も同じような状態で、すぐに電話に出られるとは限りませんので、急ぎの用事は電報と言うことになるのでした、それにしても、交換手に何番へお願いしますと告げたり、手でハンドルを回しての呼び出しは懐かしい光景で、目に焼き付いています。

電報は、郵便局の職員が、和文通話表による電話か有線電信で電文のやりとりをしていましたが、至急電報は「ウナ電」と言っていました、上記の統一略語に「ウナ」はちゃんと入っているようです、他にも年配の OM さんとの和文交信で聞いたことがあるのは「ヒ→日」とか「トキ→時」とか、話のつながりで何となくわかりましたが、昔の電報用語だったのですね。（この時の交信相手の OM は元プロの通信士、下手なバグキー打ちの多い中、素晴らしいバグキーの使い手だった）

話変わって、以前朝日新聞の記事で読みましたが、虫刺されに使う薬「ウナコーワ」（興和株式会社の製品）、命名の由来は、虫に刺されたら「早く早く、至急至急」ということで、このウナ電の「ウナ」を取って「ウナコーワ」にしたそうです。

至急を英語では「URGENT」、これを欧文で打った符号を和文で聞くと「ウナリヘタム」、これが「ウナ」の語源という人もいますが、真偽の程はわかりません。